

1776(安永5)年～1813(文化10)年

1. 経歴・狭山市との関わり

今から242年前の安永5年(1776)、隆円は武蔵国高麗郡柏原村(狭山市柏原)の吉田家に生まれた。字(あざな)を通教と称し、幼い頃から聡明であったと言う。新義真言宗智山派金剛院平間寺の第33世隆範に出会い、剃髪を受ける。しばらく平間寺で修業していたが、大本山の五百仏山智積院根来寺(京都市東大路通七条下東河原町)に入山する。そこで11年間修行する中で、彼は本山の主席になった。

2. 主な業績

智積院から平間寺に帰山すると、師匠の隆範から山首に推挙される。そして、平間寺の第34世に就任する。平間寺の発展に尽くしたことにより、亭子院の院号を賜った。

文化10年(1813)8月、第11代将軍・徳川家斉(1773～1841)が41歳になった時、家斉は前厄の厄払いを受けることになった。将軍の御成りが伝えられると、大本堂の補修や境内の整備をして将軍を待った。そして、隆円は一山を指揮し、本尊を開扉し、将軍臨席のもと荘厳な儀式を挙げる手筈であった。しかし、深夜まで準備に追われたことにより、隆円は急逝してしまう。一山は彼の死を隠して将軍を迎え、災厄の儀式は無事終えた。

すると、家斉は自分の身代わりになって亡くなった結果だと捕らえ、たいへん感激した。平間寺の朱印は僅か6石であったが、それを機会に50石を賜った。そして、平間寺は智積院の孫末寺であったが、直末寺に寺格を上げている。隆円の葬儀は1か月後の10月28日、盛大に行われたが、享年37であった。

3. 特筆

「隆円様が公方様の厄を一身に引き受け、将軍様は寿命を永らえた」と、平間寺は関東一円に知れ渡り、さらに評判になる。その後、12代将軍家慶(1793～1853)・13代将軍家定(1824～1858)・14代将軍家茂(1846～1866)の3人の徳川将軍が参詣するようになった。

江戸から日帰り可能な平間寺は多くの参拝者を集め、江戸市井の手頃な信仰と遊行の場となった。そして幕末期、関東の庶民だけでなく、日本を訪れた外国人も数多く立ち寄るようになる。



川崎大師平間寺(川崎市川崎区)

参考・引用文献 『平間寺史』平間寺出版部編 1934年
『郷土神奈川の歴史』村上直編 1985年

文責・権田恒夫